

「自分を変えていただいて」

詩 編 第51章12節～14節
ローマの信徒への手紙 第12章1節～2節

説 教 岡村 恒牧師

イエス・キリストの使徒パウロが、ローマの教会に宛てて書いたこの手紙は、私たちの《救い》ということに集中して書かれています。1節には、私たちに向かって語られた勧めの言葉が記されています。「こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。」(1節)そう語りながら、何とかして神の救いによって生きて欲しいと語りかけます。

12章は、「こういうわけで」と始まって、ここまで語ってきた福音を要約しながら、さらに一步、救いの核心に進んで行きます。5章、8章に続いて、神の恵みによってのみ救われる福音を描き出しています。ユダヤ人として律法を握りしめて生きてきたパウロは、自分自身がどれほど惨めな存在か、ということをよく知っていました。聖書が描き出す真実の愛に目をとめる時、私たちの誰一人として、神に喜ばれ、祝福されるような人間などいない、ということを知らされます。確かに、義人はいないのです。

16世紀の宗教改革者、マルティン・ルターは、聖書を繰り返し読む中で、自分自身の惨めさと神の憐れみの深さとを再発見しました。熱心に信仰者の道を歩んできたルターが、神に赦され、救われるのはただ信仰のみによることを、聖書の御言葉のから知ったのです。神が、神のひとり子、主イエス・キリストを十字架にかけて、その命を与え尽くして下さることによって、私たちすべての者の救いを実現して下さったことを知って、信じて、新しく生き始めました。

神を神として愛することができない私たちの罪を、神が赦して下さるということが、ただ、かけがえのない〈いけにえ〉によって実現しました。パウロも主イエスも、ユダヤ教の礼拝の中で育ちました。礼拝と言えば、神に〈いけにえ〉を捧げることを意味しました。詩編51編は、砕けた悔いた魂をかかえたダビデ王の詩編だと言われるものです。これは、神によって新しく造られて初めて、神の前で生きることができると告白する者の祈りです。「神よ、わたしの内に清い心を創造し／新しく確かな霊を授けてください。」(詩編51編12節)ここには、自分自身の力で自分を造り変えていく、という話が出てきません。神が、私の内に清い心を創造して下さり、新しい確かな霊を授けて下さる以外に、この私が神の前に立つことなで決してできないのだと告白しています。神殿では、神に選ばれ、特別に聖なるものとされた〈いけにえ〉だけが、

神にささげられました。神によって選ばれ、聖なるものとされて初めて、神に喜ばれる〈いけにえ〉として捧げられる、という話です。

パウロは、私たちに勧めて言います。「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。」(1節)神によって聖なる供え物とされ、受け取られて生きたら良い、と勧めるのです。12章までの御言葉を読み進んで来た者は、私たちのこの全身全霊を、神に喜ばれる供え物として神が受け止めて下さるということが分かります。ただ神の憐れみによって、神によって聖なるものとされ、受け取られる者とされたことを知って、神の前に立って歩んだら良いのです。

遊牧民は、家畜に焼き印が押され、所有者がはっきりしていることの意味をよく知っていました。キリストの使徒パウロは、自分自身がイエスの焼き印を身に受けている、と明言します(ガラテヤの信徒への手紙 6章17節)。ですから、自分自身を神のみ前に全部投げ出す以外の方法で神を礼拝することなどできないだろう、と言うのです。

「あなたがたはこの世に倣ってはなりません。」(2節)というのは、『この世と調子を合わせてはならない』とか、『この世の枠組みの中で形作られるな』とも訳される言葉です。生まれたてのキリスト教会で、洗礼が授けられる時になされた勧告の言葉だとも言われています。これまでとは違って、神によって新しく造り変えられて、この世のものではなくキリストのものとしての焼き印を押されて生きようになるのだ、と洗礼を受けようとする者に語られました。

神が私たちを選びとり、語りかけ、信仰を与えて下さる時、私たちは憐れみによって新しく造り変えられる恵みを知ります。神の憐れみによって、新しい命に生き始めるのです。

神は、私たちを罪から救い出して下さるだけでなく、私たちを新しく造り変え、神の御心を知る者として神の前に立たせて下さるお方です。聖なる、命を持つ者として歩ませて下さいます。主なる神の前に、自分自身をお捧げして、歩ませて下さるのです。そうして私たちは皆、やがて終わりの日には、主イエス・キリストと共に、神様を誉め讃えるのです。

(記 岡村 恒)

